

東日本大震災 3.11 震災・復興

栃木) 脱原発へ 夢の実現装置、実用化めざす

杉山圭子 2018年3月9日03時00分

シェア ツイート ブックマーク スクラップ メール 印刷

続きから読む



「スマート・スイッチ」を開発した電子開発の中尾崇社長（右）と取締役の安原大策さん＝先月16日、京都市下京区中堂寺南町の発表会場で

日々の生活で使う照明などの電力使用量を、生活自体は変えることなく半分以下に――。2011年の東日本大震災をきっかけに節電技術の研究を続けてきた宇都宮市のエンジニアが、それを可能にする独自の電力コントロール装置を発明した。開発には震災の被災者も協力。今夏にも初めての本格的な実証実験が始まる予定で、実用化に向けて動き出している。

特集：3.11 震災・復興



装置を開発したのは、エンジニア歴46年の中尾崇（みつる）さん（64）。東京都出身で、2007年に大手電気機器メーカーの技術者として宇都宮市へ。「世の中に本当に役立つものを、エンジニアとして何か残したい」と3年後に退職し、テーマを模索していたところへ東日本大震災が起きた。福島第一原発事故後の報道に日々接する中で、「福島に負担をかけている現状を変えなければ」と節電装置の開発を思い立ったという。

13年10月、宇都宮市徳次郎町の団地の一室を拠点に研究を開始。実験や試作を重ね、15年、電力コントロール装置の発明で特許が認められた。翌16年には「スマート・スイッチ」をはじめとする装置の改良版で改めて特許を取得している。

「スマート・スイッチ」は、必要な電力の量や時間を人工知能で判断し、オン・オフを自在にコントロールできる装置。これを使うことで、屋内外の照明や街灯、換気扇などが、必要がないのに点灯や作動をしている状況をなくすことができ、場所によっては電力使用量が現状の1割以下にまで抑えられるという。

実用化を視野に、中尾さんは16年5月に合同会社を設立し、同10月に「電子開発」の名で株式会社化した。資金面でその後押しをしたのが、東日本大震災で被災者の一人となった安原大策さん（36）だ。

福島市で生まれ育った安原さんは震災後、自主避難先の東京都立川市でメール配信の会社を立ち上げた。社長に就いた中尾さんと分野は異なるが、「どの家庭でも無理なく節電ができる『スマート・スイッチ』が全国に広まれば、電力の必要量は大きく減らせる。そう思い、出資を決めました」。現在は電子開発の取締役も務めている。

京都で実証実験へ

平昌パラリンピックを特集

9日開幕の平昌パラリンピックの記事や注目ニュースをまとめて。



紙面にプラス

デジタル限定



ぐるナビが選りすぐった厳選お取り寄せグルメをご紹介します。

ぐるすぐり

左の小さい3枚の写真を、ここに私が貼付けました。(もうお一方、澤村様が離席で残念です。)





「スマート・スイッチ」の実用化は、今年に入って現実味を帯びてきた。大阪ガスグループの京都リサーチパーク（K R P、京都市）と連携し、同社の本社敷地内で今夏にも実証実験を始めることが決まった。K R Pの足立毅（たけし）・経営企画部長（50）は「夢のような装置で、ほんまかいな、と思う人もいるでしょうが、実験がうまくいけば可能性は無限に広がる。楽しみです」と期待を込める。

連携は、日本政策投資銀行が進める新規事業創出プログラムの一環として実現した。先月16日に京都市で催された連携事業の発表会には、中尾社長と安原さんがそろって招かれ、中尾社長が自社の装置をPR。K R Pの幹部とともに、実証実験を4カ月かけて行う計画などを報告した。実験後は新商品の開発や普及活動も共同で進めるという。

震災から7年、節電技術の研究を始めて4年半。「実証実験が成功して『スマート・スイッチ』を使う人が増えれば、世の中に革命を起こせると信じている。この装置があれば原発は必要ない、と言える社会にしたいですね」。中尾社長はそう夢を語る。（杉山圭子）